

## 教師の視点から見た高校生の友人関係における問題

筑波大学大学院人間総合科学研究科 渡部 麻美

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 松井 豊

Friendship problems among high school students from the perspectives of teachers

Asami Watanabe (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Doctoral Program in Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yutaka Matsui (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

In this study, friendship problems among high school students are examined from the perspectives of teachers. One hundred and seven high school teachers responded to a questionnaire consisting of items that were based on preliminary interview with seven teachers. Factor analysis revealed that a scale for friendship problems consists of two factors—lack of self-control and conflict avoidance—while a scale of tendencies towards overall interpersonal relationships consists of three factors—lack of involvement skills, superficial relationships, and speaking avoidance. Compared with other variables, there is a relatively strong tendency to regard a lack of self-control as being problematic.

**Key words:** friendship, high school teachers, high school students

### 問 題

#### 高校生における友人関係の問題

高校生をはじめとする青年期は、友人関係の重要性が一段と増す時期であり (Youniss & Smollar, 1985)、友人関係が対人スキルの獲得や自我同一性の確立に影響を与えると捉えられている (Atwater, 1992)。

高校生は、友人関係の重要性が上昇するとともに、それ以前とは友人関係のあり方そのものが変化する時期である。榎本 (1999, 2000) は、中学生、高校生、大学生に対して調査を実施し、青年の友人関係が大学生までに、友人と遊ぶことを中心とした関係や行動や趣味の類似性を重視した関係から、互いを尊重した友人関係へと変化していくことを示唆している。山岸 (1998) は、小学生、中学生、大学生を対象に対人交渉方略の発達の变化について検討し、中学3年から大学生の間に、自他双方の欲求を

考えて対人的葛藤を解決する方略を使用する傾向が上昇することを見出している。Atwater (1992) は、17歳から18歳の青年期後期において、人間関係の複雑性を理解し、個人差を認め、友人をありのままに認めるようになることを示している。友人関係においてこれらのような変化がもたらされる高校生の時期に良好な友人関係を確立することは、その後の個人の対人関係に大きな影響を与えられ

しかし、現代の学校場面においては小中学生だけでなく高校生においても、いじめや不登校等の友人関係に関わる問題が発生している。近年、中高生を中心に学校や家庭において「キレル」現象が頻発し、問題となっている (田中・東野, 2003)。田中・東野 (2003) は「キレル」現象に関する先行研究を整理し、「キレル」子どものパーソナリティタイプとして、①自己否定タイプ、②セルフコントロール能力欠如タイプ、③他者過敏タイプ、④耐性極端タイプ、⑤対人スキル欠如タイプ、⑥攻撃タイ

プの6つのタイプを挙げている。「キレル」子どもは、友人関係において、過度な自己主張や攻撃的な対人行動を行いやすいと推測される。また、高校生を含む青年期の友人関係を扱った先行研究(榎本, 1999, 2000; 岡田, 1993)では、友人に対して率直な自己主張が行われず、友人との関わりに不安や恐れを抱く現状が報告されている。榎本(1999, 2000)は、友人関係を活動的側面、感情的側面、欲求の側面の3側面から捉えている。それぞれの側面の関連について検討した結果、高校生女子・大学生女子は「相互理解活動」をする関係において「不安・懸念」を感じる事が示唆された(榎本, 1999)。岡田(1993)は、友人との関わり方に基づく群分けを行い、「対人退却」群がふれあい恐怖を示しやすいことを明らかにしている。

以上から、高校生では、友人に対して過度な自己主張や攻撃的な対人行動をとる問題が見られる一方で、友人との深い関わりを避ける問題も存在すると考えられる。

#### 青年期の友人関係研究に見られる方法論上の限界

従来の青年期の友人関係研究の多くは、青年本人を対象とした自己評定式の質問紙調査を行なっている(榎本, 1999, 2000; 岡田, 1993; 上野・上瀬・松井・福富, 1994)。そのため、これらの先行研究は、青年の友人関係の特徴を全体的に把握して分類しており、青年の友人関係の全体像を記述的に捉えている。

しかし、高校生の友人関係における問題を解明することを研究の目的とする場合、先行研究のような方法は、以下の理由により必ずしも十分とはいえない。第1に、高校生本人を対象として自己評定による調査を実施するため、本人が自身の問題を自覚していない場合には、実際に生じている問題を正確に把握できない可能性がある。第2に、友人関係の実体を全体的に捉えようとするため、得られた結果の中に問題と見なされる側面だけでなく、健全と見なされる側面も含まれている。以上により、高校生の友人関係において生じている問題を明らかにするには、生徒本人を対象とした自己評定式の質問紙調査を実施するだけでなく、高校生と接触する機会の多い他の立場から、問題となっている点について検討を行なう必要があると考えられる。

本研究では、「友人との関わりの中で適切な対人行動が行われていない状態または不適切な対人行動が行われている状態」を友人関係における問題と捉え、高校生における友人関係における問題について検討する。本研究では、高校生の対人関係の問題を把握しやすい立場にある高等学校の教師を対象とし

た調査を実施する。教師を対象とすることによって、高校生自身には認知されていない問題を明らかにすることができると考えられる。また、教師の年齢や性別などの属性によって問題と見なす側面が異なると考えられるため、教師の属性による、高校生の友人関係における問題に対する認識の差異についてもあわせて検討する。

### 予備調査

本調査の項目作成に先立ち、教師の視点から見た高校生の友人関係における問題を探索的に検討するために、現職の高等学校教師を対象とした半構造化面接を実施した。

#### 調査対象者

現職の高等学校教師7名(男性4名、女性3名)。調査対象者の所属する高等学校の所在地は、福島県、茨城県であり、すべて共学校であった。調査対象者の平均年齢は32.1歳( $SD=9.32$ ; 23歳~43歳)、平均在職年数は9.9年( $SD=8.80$ ; 2年~24年)であった。

#### 調査方法

調査対象者の勤務校において、30分から60分の面接を実施した。調査期間は2005年7月~8月であった。

#### 調査内容

半構造化面接において尋ねた内容は「生徒指導に関して困ったこと」、「最近の高校生の対人行動について気になること」、「最近の高校生の友人関係の特色」などである。

#### 結果と考察

予備調査の結果得られた発言は、筆者によって分類された。得られた発言には、個々の高校生が抱える問題として発言された内容と、高校生一般に見られる傾向として発言された内容とが含まれていた。そこで、前者を「高校生の友人関係における問題」、後者を「対人関係全体の問題傾向」と捉え、カテゴリーに分類した。高校生の友人関係における問題は、「物怖じせずになりたいことを言う生徒の存在」、「言いたいことを言わない生徒の存在」、「感情制御の不得意さ」、「嫌われることに対する不安」、「他者への配慮の不足」、「周囲の雰囲気ゆだねる傾向」、「摩擦をよくないものとする信念」の7つのカテゴリーに分類された。対人関係全体の問題傾向は、「対人行動のあり方の両極化」、「コミュニケーション・スキルの不足」、「気軽なつき合いをする傾向」、「携帯電話の影響」、「自己の不確立」、「対人関係のあり方における性差」、「学校や地域による違

い」の7つのカテゴリーに分類された。

高等学校の教師に対する半構造化面接から、高校生は言いたいことをはっきりと言う生徒と言えない生徒に両極化していることが示唆された（「物怖じせずに言いたいことを言う生徒の存在」、「言いたいことを言わない生徒の存在」、「対人行動のあり方の両極化」）。また、高校生は友人から嫌われることを恐れ、周囲の友人との葛藤や対立を避けているものの（「嫌われることに対する不安」、「摩擦をよくないものとする信念」）、ときには感情がコントロールできずに不適切な行動をとる（「感情制御の不得意さ」）ことも明らかになった。

「携帯電話の影響」、「自己の不確立」、「対人関係のあり方における性差」、「学校や地域による違い」については、友人関係だけでなく、高校生の生活全般に影響する要因であると考えられることから、以降の本調査では取り上げないこととした。

## 方 法

予備調査を踏まえて質問項目を作成し、高等学校の教師を対象とした質問紙調査を実施した。

### 調査対象者

高等学校教師107名（男性67名、女性40名）。調査対象者の所属する高等学校の所在地は、福島県、茨城県、東京都、静岡県、三重県、大阪府であり、すべて共学校であった。調査対象者の平均年齢は34.3歳（ $SD=9.37$ ；23歳～63歳）、平均在職年数は10.8年（ $SD=9.16$ ；1年～42年）であった。

### 調査方法

手交または郵送によって質問紙を配布・回収した。調査期間は2005年11月～12月、2006年9月であった。

### 調査内容

予備調査の半構造化面接における回答を参考にし、項目を作成した。高校生の友人関係における問題として、「物怖じせずに言いたいことを言う生徒の存在」、「言いたいことを言わない生徒の存在」、「感情制御の不得意さ」、「嫌われることに対する不安」、「他者への配慮の不足」、「周囲の雰囲気によだねる傾向」、「摩擦をよくないものとする信念」の7つの問題についてそれぞれ5項目から8項目ずつ、計47項目を作成した。教示文は「普段、生徒さんの友達との関わり方をご覧になっていて、以下のようなことをどのくらい問題だと感じますか。あてはまる数字に○をつけてください」であり、選択肢は、「1：全く問題ではない」「2：あまり問題ではない」「3：どちらともいえない」「4：やや問題であ

る」「5：非常に問題である」の5件法であった。また、対人関係全体の問題傾向から、「対人行動のあり方の両極化」、「コミュニケーション・スキルの不足」、「気軽な付き合いをする傾向」の3つの問題傾向について8項目、計24項目を作成した。対人関係全体の問題傾向の項目は、友人関係における問題と比較して、はっきりとした問題を示すとはいえない項目も含まれているため、教示文は「普段、生徒さんの友達との関わり方をご覧になっていて、以下のようなことがどのくらいあてはまると思いますか。あてはまる数字に○をつけてください」であり、選択肢は、「1：あてはまらない」「2：あまりあてはまらない」「3：どちらともいえない」「4：ややあてはまる」「5：あてはまる」の5件法であった。

それぞれの質問項目の内容については、事前に筆者と現職の高等学校教師1名が、意味の捉えにくい表現が含まれていないことや、実際の高等学校の現状とかけ離れた内容が含まれていないことなどを確認した。

## 結 果

### 尺度構成

友人関係における問題の項目について因子分析（主成分分解・プロマックス回転）を行なった。因子の解釈可能性から、2因子解を採用した。どの因子に対しても負荷量が.40以下であった項目を削除し、残された41項目を使用して再度因子分析を行なった（Table 1）。

第1因子は、他者や周囲への配慮ができず自己の感情や行動のコントロールが不足する状態を示す内容であったため「自己制御不足問題」と解釈した。第2因子は、他者や周囲からの批判や反感を恐れ、対立を避ける状態を示す内容であったため「葛藤回避問題」と解釈した。回転前の累積寄与率は43.3%であった。各因子に負荷の高かった項目の $\alpha$ 係数を算出した。第1因子が.94、第2因子が.91と、いずれも十分な信頼性を示した（Table 1）。

また、各因子に負荷の高かった項目の平均値を算出し、尺度得点とした（Table 3）。

対人関係全体の問題傾向の項目を用いて因子分析（主成分分解・プロマックス回転）を行なった。因子の解釈可能性から、3因子解を採用した。どの因子に対しても負荷量が.50以下であった項目を削除し、残された18項目を使用して再度因子分析を行なった（Table 2）。

第1因子は、他者との接し方が分からず、相手に

深く関与することが不得意な傾向を示すため「関与スキル不足傾向」と解釈した。第2因子は、誰とでも気軽なつき合いはできる傾向を示すため「気軽な関係傾向」と解釈した。第3因子は、言いたいことがあってもそれを言わずにいる傾向を示すため「発言回避傾向」と解釈した。回転前の累積寄与率は48.3%であった。各因子に負荷の高かった項目の $\alpha$ 係数を算出した。その結果、.62~.82と、一定の信頼性を示した (Table 2)。

また、各因子に負荷の高かった項目の平均値を算出し、尺度得点とした (Table 3)。

各尺度得点の平均値を見ると、すべての得点で理論的中間点である3を越えていた。平均値を比較したところ、高校生の友人関係における問題の中で、相対的に高く問題視されていたのは「自己制御不足問題」であった。

#### 性別、年齢、担任学年による平均値の違い

調査対象者の性別による各尺度得点の平均値の差を検討するため、 $t$ 検定を実施した。その結果、「発言回避傾向」において有意差が見られ ( $t(105) = 2.9, p < .01$ )、男性の調査対象者が女性よりも、高校生の「発言回避傾向」について強く認識していることが明らかになった。

調査対象者の年齢による高校生の友人関係における問題の認識の差を検討するのに先立ち、調査対象者の年齢について群分けを行った。下位25パーセント順位、上位25パーセント順位に該当する対象者をそれぞれ年齢低群、年齢高群とした。年齢低群の調査対象者は23歳から26歳までの18名であり、年齢高群の調査対象者は39歳から63歳までの28名であった。各尺度得点の年齢低群と年齢高群による平均の差を検討するため、 $t$ 検定を実施した。その結果、「関与スキル不足傾向」において有意差が見られ ( $t(44) = 2.5, p < .05$ )、年齢低群が年齢高群よりも、高校生の「関与スキル不足傾向」について強く認識していることが明らかになった。

調査対象者の担任する学年による各尺度得点の平均値の差を検討するため、分散分析を実施した。その結果、「関与スキル不足傾向」において、有意な主効果が見られた ( $F(2, 58) = 3.5, p < .05$ )。多重比較 (TukeyのHSD検定)を行ったところ、1年生と3年生の担任との間に有意な差が見られ ( $p < .05$ )、1年生を担任する教師は3年生を担任する教師よりも、「関与スキル不足傾向」について強く認識していることが明らかになった。

## 考 察

### 教師の視点から見た高校生の友人関係における問題

各尺度得点の高さから、いずれの問題、問題傾向とも、高等学校の教師が現代の高校生の友人関係の特徴であると考えていることが示された。

教師の認識の仕方の全体的な傾向を見ると、「自己制御不足」が相対的に強く問題視されていた。したがって教師は、現代の高校生が自己をコントロールできずに、相手や周囲への配慮が欠けた一方的な行動をしていることを問題視していると考えられる。これらの問題は、田中・東野 (2003) が挙げた「キレル」子どものタイプのうち、②セルフコントロール能力欠如タイプや⑥攻撃タイプと対応する。社会に適応するための知識や行動の仕方を教える立場である教師の視点から高校生の対人行動を見た場合には、自己のコントロール不足に基づく人づきあいの稚拙さや不器用さが目につきやすいと考えられる。特に、感情をコントロールできず友人に対して攻撃的な振る舞いをしたり、配慮のない一方的な行動をとったりすることは、他の行動よりも目立ちやすく、教師から問題視されやすいと推定される。

### 様々な要因による尺度得点の違い

調査対象者の性別について、男性の教師は女性の教師よりも高校生の「発言回避傾向」を強く認識していた。従来より男性性は主張性との間に正の相関があることが示されており (Radin, 2000)、男性の方が自分の意見や感情を積極的に表明すると考えられる。男性の教師は、教師自身のふだんの発言傾向と比較して、生徒が自分の言いたいことを言わずに発言を回避していると思っていると推測される。

また、調査対象者の年齢について、年齢の低い教師は年齢の高い教師よりも、「関与スキル不足傾向」を強く認識していた。年齢の低い教師は、生徒との年齢差が比較的小さいため、生徒の友人関係について教師自身との比較に基づいた判断を行いやすいと考えられる。その結果、生徒の友人との関わり方の稚拙さに注目しやすく、スキル不足をより顕著に感じていると推測される。

調査対象者の担任する学年については、1年生を担任する教師が3年生を担任する教師よりも、「関与スキル不足傾向」を強く認識していた。3年生は、高校生活を通して友人と関わるスキルが1年生よりも熟達していると考えられる。3年生を担任する教師は、普段自分が多く接する生徒の傾向から、高校生の人と関わるスキルがそれほど不足しているとは捉えていないと考えられる。

Table 1 友人関係における問題の因子分析結果（主成分分解・プロマックス回転・2因子指定）

	1	2	h <sup>2</sup>
<b>F1 自己制御不足問題 <math>\alpha = .94</math></b>			
友達の気持ちを気づかうということがない	.80	-.07	.63
自分の感情をコントロールできない	.76	.02	.58
相手に有無を言わず、自分のしたいようにする	.75	.00	.56
どのようなことを言うと友達が傷つくか、わかっていない	.74	.02	.56
興奮すると、周囲の状況を考えなくなってしまう	.72	-.15	.52
友達に自分の意見を押しつけてしまう	.72	-.02	.52
怒ると、それを抑えて落ち着いて行動することができない	.72	-.13	.51
自分の気持ちが優先で、友達の都合を考えていない	.72	.06	.53
感情が高ぶると、何を言われても聞く耳をもたない	.69	.02	.48
意識せずに不適切な発言をしてしまう	.68	-.16	.47
自分のことは一方的に話す、友達の話はきちんと聞いていない	.68	.14	.50
友達に対する配慮が足りない	.65	-.08	.41
悪気はないのに、友達を傷つけるような発言をしてしまう	.64	-.02	.41
自分のせいで友達が嫌な思いをしても気がつかない	.64	.02	.41
友達がやっていたら良くないことでも一緒にやる	.63	-.03	.39
友達と話をするとき、自分のことだけを一方的に話す	.61	.10	.40
友達がつらい思いをしていても、気に留めない	.61	.14	.41
理性ではなく、そのときの感情で行動する	.60	-.01	.36
調子に乗ると、つい言ってはいけないことまで言う	.59	-.05	.34
怒りにまかせて怒鳴ることがある	.54	-.12	.29
周りが何か言うと、自分の意見をすぐに変えてしまう	.45	.23	.27
友達が悪いことをしていても、止めることができない	.42	.13	.21
<b>F2 葛藤回避問題 <math>\alpha = .91</math></b>			
友達から批判されたくないと思っている	.00	.74	.55
ケンカや言い争いはさけるようにしている	.04	.74	.55
友達からどう見られているか気にしている	-.09	.72	.51
友達の反感を買わないようにいつも気をつけている	.11	.71	.53
自分一人だけ周りと別のことをしないようにしている	.07	.69	.49
その場の雰囲気や壊すような発言はしない方がいいと思っている	-.14	.69	.47
たとえ相手をよくするためでも、否定的なことは言わない方がいいと思っている	.12	.67	.49
友達と意見を戦わせるより、その場をなごやかに過ごすことを優先している	-.32	.66	.49
友達から嫌われることを恐れている	-.20	.66	.44
自分の判断ではなく、周りに合わせた行動をしている	.14	.63	.44
友達の輪から外れることを恐れている	-.04	.63	.39
ケンカをさけるために、相手に悪いところがあっても指摘しないようにしている	.14	.63	.43
友達との関係を壊してまで意見を戦わせることはしない	-.19	.61	.39
相手に非があっても責めない	-.01	.61	.37
自分のことを嫌いな人は、1人もいない方がいいと思っている	.19	.54	.35
友達に嫌なことを言われても言い返せない	.27	.50	.35
自分の意見があっても、友達の意見に無理に合わせている	.33	.47	.37
友達と対立することをよくないことだと思っている	-.16	.45	.21
周りの雰囲気によって自分の行動を決める	-.03	.43	.18
負荷量の平方和	10.20	7.84	

因子間相関 .12

Table 2 対人関係全体の問題傾向の因子分析結果 (主成分分解・プロマックス回転・3因子指定)

	1	2	3	h <sup>2</sup>
<b>F1 関与スキル不足傾向 <math>\alpha = .82</math></b>				
友達と仲良くしたいのに、どうしていいかわからない	.67	-.19	.03	.48
言い方が不適切で、本当の気持ちが伝えられない	.67	.11	-.05	.46
友達との間に生じた問題を自分たちで解決することができない	.66	-.16	-.09	.44
対人関係が不得意である	.66	-.05	.04	.45
言いたいことを何でも言う子と言わない子に2極化している	.64	.05	-.18	.42
他者との距離のとり方が極端に近いか、極端に遠いかのどちらかである	.64	-.07	-.02	.40
友達との間に問題が生じると、すぐに教師に頼る	.59	-.10	-.03	.34
新しい友達をつくる力がない	.58	-.20	.26	.49
みんなで楽しい会話をするのは得意だが、深刻な話はしない	.55	.06	.09	.34
その場が楽しければよいと思っている	.54	.29	-.19	.42
<b>F2 気軽な関係傾向 <math>\alpha = .67</math></b>				
気軽な会話は誰とでもできる	-.26	.70	-.02	.55
八方美人で誰とでもうまくつき合う	.04	.70	.17	.49
気軽な人間関係はそつなくこなす	.03	.70	-.04	.50
全体的に見て、自分から積極的に話しかける子が多い	-.14	.55	-.21	.40
<b>F3 発言回避傾向 <math>\alpha = .62</math></b>				
言いたいことを何でも言う子の方が、言わない子よりも多い	.34	.17	-.78	.73
言いたいことを言わない子の方が、何でも言う子よりも多い	.01	-.26	.75	.69
友人関係を壊すような深刻な話はしない	.05	.48	.64	.56
言いたいことがあっても、それをどう言っているかわからない	.41	.30	.51	.54
負荷量の平方和	4.25	2.47	2.18	
因子間相関				
	1	.05	.13	
	2		-.15	

Table 3 各尺度得点の平均値と標準偏差

	N	自己制御 不足問題	葛藤回避 問題	関与スキル 不足傾向	気軽な関係 傾向	発言回避 傾向
男性	67	4.09 (0.47)	3.22 (0.52)	3.48 (0.53)	3.11 (0.59)	3.55 (0.55)
女性	40	4.08 (0.58)	3.24 (0.55)	3.63 (0.56)	3.16 (0.65)	3.19 (0.68)
年齢低群	18	3.97 (0.41)	3.12 (0.57)	3.79 (0.50)	3.08 (0.78)	3.39 (0.73)
年齢高群	28	4.11 (0.58)	3.28 (0.58)	3.42 (0.49)	3.13 (0.55)	3.39 (0.46)
1年担任	26	4.12 (0.39)	3.16 (0.61)	3.72 (0.44)	3.15 (0.66)	3.46 (0.80)
2年担任	19	3.93 (0.67)	3.22 (0.48)	3.65 (0.69)	3.14 (0.68)	3.49 (0.63)
3年担任	16	4.03 (0.56)	3.32 (0.52)	3.28 (0.44)	3.27 (0.52)	3.27 (0.50)
全体	107	4.09 (0.51)	3.23 (0.53)	3.54 (0.55)	3.13 (0.61)	3.41 (0.63)

括弧内は標準偏差 \*\* 1%水準で有意差があることを示す \* 5%水準で有意差があることを示す

## 今後の課題

本研究には、以下の2点の課題があると考えられる。第1に、本研究の対象者数は107名と、因子分析を実施するには少数である。したがって、本研究の因子分析の結果は、教師の認識の構造について一定の示唆を与えているものの、対象者数が少ないため確定的な議論はできない。

第2に、年長の教職歴の長い教師の認識の仕方について、検討が十分ではない点である。本研究の対象者の平均年齢は34.3歳であり、対象となっている教師の多くが比較的年齢の低い教師である。40代から60代の教師も含まれているものの、年齢の分布は若年層に偏っている。

これらの問題点については、年齢のバランスの取れた十分な大きさのサンプルを用いて、再検討を行うことが求められる。

また、本研究の結果はあくまでも教師の視点を通して得られたものであり、高校生が自身の友人関係について認識している問題の構造は、教師とは異なっている可能性がある。今後は、高校生を対象とした調査を実施し、高校生が自身の友人関係についてどのように捉えているかを検討することが必要である。これらの検討によって、高校生の円滑な友人関係を促進するための援助を充実化させていくことが求められる。

## 引用文献

- Atwater, E. (1992). *Adolescence* (3rd ed) New Jersey: Prentice Hall.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動に対する感情の発達の變化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子 (2000). 青年期に友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.
- 岡田 努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- Radin, L.B. (2000). Outspokenness and future expectancies in adolescents: The relationship of gender and role orientation. Dissertation Abstracts International: Section B: The Sciences and Engineering, 60, 12-B, 6379.
- 田中宏二・東野真樹 (2003). わが国における「キレる」という現象に関する心理学的研究の動向 岡山大学教育学部研究集録, 124, 79-85.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 山岸明子 (1998). 小・中学生における対人交渉方略の発達及び適応感との関連 - 性差を中心に - 教育心理学研究, 46, 163-172.
- Youniss, J. & Smollar, J. (1985). *Adolescent relations with mothers, fathers, and friends*. Chicago: The University of Chicago Press.

(受稿3月21日：受理5月7日)